一日桜

裏空裏空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一日桜

【Ｎコード】
Ｎ９１７０Ｍ

【作者名】
裏空裏空

【あらすじ】
季節は冬の１月。物語はボロ図書館から始まった。少年には自分の夢というものが分からなかった。少女はある問題を抱えていた。様々な問題を抱えた人たちを、主人公の少年の視点で描きます。

第0章　プロローグ

俺は自分の名前が嫌いだ。変な名前だから。

―現（うつつ）

これが俺の名前。この名前のせいで小学校の時はしょっちゅうからかわれた。

特に地獄だったのは出欠席をとる時だった。しかもこれは毎日やってくる。クラスのほとんどの人は名字だけで呼ばれていたけど、俺に限っては名前まで呼ばれたのだった。小学校6年間早川（はやかわ）という名字の奴と一緒だった（俺の通っていた小学校は全学年とも2クラスしかない小さな小学校だった）ために、名字だけでは判断できないのを考慮した担任によって毎日のように「早川現くん」と先生が呼び、クラスの爆笑で終わる。先生からしたら生徒うけばっちりとか思ってたんだろうけど、ネタにされるこっちの身にもなれって思った。いい迷惑だった。

さらに地獄なのは、担任が俺の名前をかんだ時だ。「早川うちゅつくん」なんて間違えた時にはクラスはいつも以上に爆笑するのだった。

でも嫌いな理由はそんなことだけじゃなくて、この名前を付けたのが父親（おやじ）だったからだ。俺の父親は大酒飲みでギャンブル好きのどうしようもない男だった。母さんが早くに死んだのもこの父親が苦労をかけ過ぎたせいだと思う。俺が酒を止めるように言っても「うるせい。酒がねえ人生はなあ、死んだのも同然だ。酒で死ねたら本望だ」と笑って取り合おうとしなかった。結局父親は酒で体を壊し、そのまま死んだ。ざまあみろって思った。

そんな父親の口癖が「現実を見ろ」だった。いつもいつも、顔を合わせるたびに言ってきた。

「現。現実を見るんだ。夢ばっかり見てると父さんみたいになっち

まうぞ」

ギャンブル好きの父親にこんなことを言われても説得力などまるで無かったのだが、子供ながらに俺はその言葉を受け止めていた。確かに夢だけで人間生きてはいけないと、辛いけど現実を見て生きていかなくてはいけないと。そう受け止めていた。

名前の由来は聞いてはいなかったけど、たぶん俺に現実を見て生きて欲しかったから、『現』と名付けたんだと思う。そんな名前は俺の生き方にも反映していて、高校受験で県内で3本の指に入る進学校を「頑張ればいける」と中学3年の時の担任に言われたが、現実を見てレベル的に普通の松日高校を選んだ。

別に父親の言葉にそのまま従ったわけではなく、その父親のギャンブルで稼いだ借金のせいで私立など通えるはずも無かったのである。落ちたら最後、とても滑り止めの私立など通えるはずも無く、中卒か浪人を選ばなくてはいけなくなるからだ。今のご時世中卒で職にありつこうなんて無理な話だ。浪人なんて、そんなことはどこの誰が許そうとも、うちの家計が許さなかったのだ。だから、現実を見るしかなかったのだった。

第0章　プロローグ（後書き）

どうも、裏空裏空です。うらそらりくうと読みます。まだ小説を書くのは初心者で、至らない点が多々見られると思いますが、温かく、そして厳しく見てやってください。

感想などありましたら、書いてくださると作者は飛び跳ねて喜びますので、書いてあげてください。

第1章　嘘

冬休みの今はこうして近くの図書館に通って、妹の読みたい本を借りてきてやっている。

まだ午後1時だから日が照ってはいるけど、冬の寒さの方が勝っていた。寒い……

妹は本当なら今年から中学生だけど、事情があって通うことが出来ない状況だ。

―高安動脈炎

医者を目指してるわけじゃないから病気のことはよく分かんないけど、お医者さんの話では、原因不明の病気らしい。薬の投与で回復することが多いらしいんだけど、妹の場合、弁膜症とかいう病気を併発(へいはつ)したらしく、かなり厄介(やっかい)なんだそうだ。手術をすれば直るらしいんだけど、妹は生まれつきに体が弱くて手術は難しいらしい。これも父親のせいだと思う。いや、そう思いたい。何かのせいにしなくちゃ、何で妹なんだって気持ちをどこにぶつけりゃいいんだって話だ。だから俺は大嫌いな父親にぶつけてやる。

そんなことしても妹の病気が治るわけじゃないけど……

ここは県内でも一番の品揃えで有名な図書館だ。だけど、少しボロイ。だから、学生なんかは少し遠いけど街の最近建ったキレイでオシャレな図書館に行ってる。ま、俺は図書館で長居をするわけじゃないから別に気にならない。利用者が近所のジイさんバアさんばっかでも、図書館にナンパに来てるわけじゃないから気にならない。

そんなオンボロ図書館も最近になって図書カードというものを導入した。この図書館の全ての本にはバーコードが貼り付けてあり、そのバーコードで本の貸し出し、返却を管理している。

て言っても、俺の中学の時には学校の図書館にすでに導入されて

いて、今頃！？　って話だけど。街のオシャレ図書館に持ってかれた利用者を取り戻すための秘策？　らしい。

ふと俺は気になった。この図書館の利用者のほとんどがジイさんバアさんばかりなのは確かだが、珍しいことに学生らしき人が立っている。しかも、かなりおどおどしている。

いるんだよねー、図書カードをどうやって作ればいいか分からない人。

俺は最近5人くらいの老人に図書カードの作り方を教えてやった。と言っても、書類にサインして司書さんに見せて終わりなんだけど。ここの司書さんは客に対して不親切なんだよなー。困ってても何にも声かけてあげないんだから。

そのまま見過ごすのもアレだから、俺はその子を助けてやることにした。助けるなんて大げさだけど……

「図書カードの作り方ですよね？」

「へ？　あ、はい。そうです。あのー、どこで作ったらよろしいんですか？」

その子はとても真面目そうな、勉強のできるような顔をしていた（どんな顔だよ！）。

俺は得意げになり、

「それはですねー、あちらにある書類の空欄を埋めてですね、司書の方に見せるだけなのですよ」

「そうですか。ありがとうございます」

長い髪をサラサラと垂らしながら、彼女は丁寧にお辞儀をしてみせた。

「いえいえ、そんな大層なことはしてませんよ。ではごゆっくり」

俺はこの図書館の持ち主であるかのような振る舞いで格好良く彼女から立ち去ろうとした――――したのだけど、彼女のその手に持っている本が俺を止めさせたのだった。

――斜陽（しゃよう）

太宰治（だざいおさむ）の斜陽。太宰治を読んだことのない俺にとってその本はどうでもよかったが、妹の『読みたい本リスト』の中に入っていたのだ。妹の望むことは何でもしてやりたい、だからその本を見たからには見過ごすことは出来なかったのだ。

「斜陽……」

俺はポツリとつぶやいた。彼女は俺のつぶやきに反応したのか、

「知ってるんですか？」

と、嬉しそうな顔つきになり俺の顔を覗き込んできた。

「ええ、まあ、その……」

「斜陽いいですよね。太宰さんの中じゃ有名すぎる本ですけど、あ、だから知ってるのか。太宰さん知ってて、斜陽読んだこと無い人なんていないですよね。ごめんなさい」

「そ、そうですよ……ありえないですって。え！？　読んだことあるんですか？」

読んでるなら話は早い、俺に譲ってもらおう。

「ええ、もちろん。何回読んだっけなー……とにかく何度も読みましたよ」

「じゃ、じゃあ、俺に譲ってくれませんか？」

彼女、優しそうな顔してるし絶対に譲ってくれそうだ。

「何でですか？　あなた読んだんじゃないんですか？」

意外な、いや想定外の反応だった。俺は読んだなんて一言も……いや、言ってた気がする。て、あんたも数え切れないほど読んでんだろ！？

「読んだんですけど……そう、そうだ、もう一度読みたくなって」

「そうですか。でもこれは私が借りるんです。私が先に手に取ったのだから私のですよね？」

正論だ。まさしく彼女が言っているように、それはあなたのものです。しかし……

「どうしても、また読みたいんですよー。今日読まないと夜も眠れずに睡眠不足で明日の昼ごろ眠くなって、昼寝して、今度は夜目が

冴えちゃって夜眠れずっていう悪循環が生まれてしまうんですー」
我ながら切実な訴え。これで彼女も折れてくれるだろう。
「それ私もあります。長編小説なんかは、続きが気になってしようがなくて、2日間眠らなかったことあります。でも――――だめです。これは私が借りるんです。」
折れなかった。俺と彼女との共感できる部分を広げただけで、話は一向に進行しなかった。
「それじゃあこうしましょう」
「どうしましょう？」
彼女は小首を傾げる。
今度こそ彼女は折れてくれるはずだ。
「えっとですね、この本は俺が先に借りさせてもらいます。それでいつもなら3週間借りられるはずのこの本を、1週間で返すってのはどうですか？　1週間後に返しますから、好きなだけ借りてください。どうです？」
「うーん……」
と彼女はうなって、ひどく悩んでいるようだった。
たのむから折れてくれよ。
しばらく考えた末に彼女が出した結論は、
「ごめんなさい。やっぱり無理です」
折れなかった――――！　こんなにも読みたいって言ってるのに、何で折れてくれないんだ――――！
「ちょっと待ってくれよ、読みたいって言ってんだから貸してくれたっていいじゃねーかよー！」
俺はつい、思い通りにならないから声を荒げてしまった。我ながら、大人気ない……
道理も何もあったもんじゃなかった。これじゃあ『俺のものは俺のもの。お前のものも俺のもの』のジャイアンじゃねーか。それでも譲るわけにはいかなかった。妹の望みは叶えてやりたかった。妹には悲しい思いをしてほしくなかった。だから譲れないのだ。

「な、何ですかいきなり！？　あなたが言ってることは間違ってますよ！　世の中には早い者勝ちって言葉があるの知らないんですか？」
「ああ、知ってるとも。でもなー、男には譲れないものがあるんだよー！」
俺の譲れないってものは、このたった一冊の本か？　自分で言っておいて泣けてくる。
「何ですかそれ！　私だって、女にだって譲れないものがあるんです！」
「たかが一冊の本ぐらいに何本気になってるんだよ！」
これは、この一言はマズかった。彼女に対してこれは禁句だったようだ。彼女を泣かせてしまったのだ。
「ひどい……ですよ……たかが、なんて……」
彼女は目に涙を浮かべ、俯いてしまった。なぜ泣いたのかは知らないが、俺は生まれて初めて人を泣かせてしまった。やってしまったのだ。
「いや……その、悪かったよ……」
その時やけに彼女のすすり泣く音が響いているのに気付いた。
「図書館ではお静かにお願いしますね！」
少し怒気を含んだ司書さんの言葉に、俺はコクリと静かにうなずいた。

それから、俺は彼女に斜陽を譲り（といっても最初から彼女のものだったのだが）、他の妹の『読みたい本リスト』に記されている本を借り、図書館を出た――――出たところに、彼女は立っていた。
彼女と俺は図書館内に設置されてあるベンチに腰をかける。
「さっきは急に泣き出したりなんかしてごめんなさい」
「いや、こちらこそ本当にごめん」
「で、私はあなたの返答しだいでこの本を譲ろうと思うんですが、よろしいですか？」

「え、いいの！」
やっぱり、優しい人なんだ。さすがは俺の目。人を見る目だけはあるんだよなーうんうん。
「はい。じゃあ、私の質問に答えてください」
はいはい、答えてやりますとも。その本さえ手に入ればいいんだ。
「斜陽のどこが良かったですか？　斜陽のよさが分かる人に手にとってもらいたいから、ね？」
え！？　やっぱりこの人優しくない！　読んだこと無いやつに感想聞くってどうよ、無理にもほどがあるだろ……いや、俺は読んだって嘘ついたんだっけ。こうなったら知ったかぶりでもいいから、当たり障りの無い会話でしのぐんだ。
「ほら、斜陽ってさ。太宰治ならではの味があってさ、斜陽ってタイトルの響き、これに惚れたね」
俺は何を語ってるんだ？　知ったかぶりにもほどがある。
「ほう。それで？」
「それで……？　えーと……」
考えろ早川現（はやかわうつつ）！　読んだこと無い奴が、悪あがきできる最後の手段――そうだ！　タイトルから内容を想像するんだ！
斜陽――夕日のことだよな。夕日？　夕日と言えば、「あの夕日に向かって走れ」とかいう学園ドラマ。そうか、斜陽は学園ドラマなんだ。
「感動したよなー最後なんか、俺涙が止まらなかった」
「そっか、男性が読むと涙が出てくるんですね。私は女の強さに感動はしたけど、涙は出なかったですよ？」
女の強さ？　ってことは主人公は熱血の女教師。
「いや、涙出るって。特に最後の夕日のシーンなんか感動したよ」
しまった！　つい斜陽を学園ドラマの方向で話を進めちまった。
「……うん、そうですね。私もそこは感動しました」
ん？　意外といけるぞ。もしかして俺の斜陽、学園ドラマ説は当たってるんじゃないか？

「生徒との絆が深まって、最後のシーン。やっぱ、あそこに持ってく太宰は憎いよ」
今度は思い切って『生徒』なんていう作品が絞り込まれる言葉を入れてみた。これで彼女も納得するだろう。
「うんうん。分かります分かります。『お前らついてこーい』ってセリフ、当時話題になったんですよ」
「そうなんだ。知らなかった」
「ええ、私も初耳です」
「え、どういうこと？」
「やっぱり読んでいないんですね、斜陽」
バレた。悪あがきもここまでか……
「お前！　俺をだましたのか！？」
こうなれば開き直るしかなかった。
「先に嘘をついたのはあなたの方じゃないですか！　私の嘘はかわいいほうです」
「嘘にかわいいもブサイクもあるか！」
「ふふふ、ははは」
彼女は上品に口に手を添えて、小さく笑い出した。泣いたり、笑ったり、怒ったり、感情の移り変わりが激しいやつだ。
「な、何がおかしんだよ」
「だって、「嘘にかわいいもブサイクもあるか」っておかしいじゃないですか。あるわけ無いのに、それがおかしくって」
彼女は笑いを含みながら、そう言った。
俺も何だか笑えてきて、一緒になって笑った。
「読んで無いのに、あそこまで冗舌（じょうぜつ）になれるのって、ある意味すごいと思います。知ったかぶりの帝王です」
「そ、そうか？　そりゃどうも」
意外な特技の発見だった。『知ったかぶり』不名誉な特技だった。
「あ、そうだ。あなたはどうして斜陽を読みたいと思ったんですか

？」
「いや、俺じゃないんだ。妹がさ、読みたいって言うもんだからそれで」
「へえ、妹さん思いなんですね」
彼女は俺に微笑みかけた。か、かわいい……なんて言うか包み込んでくれるような笑顔、優しい笑顔、天使の微笑ってこういうものじゃないのか？　女性の笑顔をこんな間近で浴びると、破壊力あるんだな。
「私、妹さんに会ってみたいです。ほら、本が好きな人に悪い人はいませんから」
「え？」
突然のことについ間の抜けた声を上げてしまった。
「だめ、ですか……？　ですよね、こんないきなり、迷惑ですよね……」
「い、いやー。全然いい。むしろこっちからお願いするよ！　お願いします是非妹に会ってあげてください！　絶対妹も喜びます」
妹は小さい時に病気にかかり、それ以来入院生活を送ってきたから学校もあまり通っていないため、友達はいなかった。だから、妹には特に同性の友達を作ってほしかった。
「そ、そうですか……じゃあ是非会わせてください。私もお友達が欲しいですから」
「うん、そうしてくれると助かるよ」
「あ、まだお名前をお聞きしていませんでしたね。私は古城美百合（ふるしろみゆり）と言います。古い城と書いて古城です。よろしくお願いしますね」
古城。変わった名字だな。この辺じゃ聞かない名字だけど。
「俺は、早川……」
俺は、自分の名前にものすごいコンプレックスを抱いている。ここで、古城にクスリと笑われたら傷つくぞ、俺。繊細なんだよ俺の心は。
「俺は、早川現だ」

顔見知りに名前いじりされるのは決して快くないが、初対面の人に笑われるほうが大ダメージだ。
「へえ、現くん。変わった名前ですね。でもぴったしって感じですよ」
「そりゃ……どうも」
どう『ぴったし』なのかは分からないけど、なんか古城にそう言われて初めて自分の名前を好きになることができた気がした。
「私、今度松日（まつひ）高校に通うことになったんですけど、現くんはどこの高校に通われているんですか？」
「俺も松日……って、転校生！？」
「は、はい。そうです。3学期から松日高校の2年生です」
「2年生ってことは俺と同じじゃねーか！」
「現くんは私と同学年なんですか！？」
どこに驚いてんだよ！　なんて突っ込みはどうでもいい。世間って狭いもんだなとしみじみと思うよ。こんなところで転校生に会えるなんてな。
「てっきり、年下だとばかりに……失礼しました」
「いや、なんかお前敬語使ってるし、年下相手にしゃべってるようには見えなかったから、別に見下された感じなかったぞ」
「そうですか？　じゃあ、よろしくお願いしますね、現くん」
古城は再び俺に微笑みかけた。
「あ、ああ」
俺は古城の笑顔に照れながらも返事をした。

それから俺と古城は妹のいる病院まで二人で話しながら向かった。その中で聞いた話で、斜陽の説明があったのだけど、俺の考えていた『熱血学園ドラマ』とはジャンルが全く違い、没落していく貴族の家庭の話らしい。没落していく学園を描いた作品だったら、まだ当たってたのにな……って、全然面白そうじゃねー！

第1章　嘘（後書き）

どうも、裏空裏空です。今回、太宰治さんの斜陽を取り上げたのですが、読んで無い方には何のことかさっぱりだったと思います。この一日桜にはこういった文学作品が時々登場する予定です。次回も読んでいただけると光栄です。

第2章　病室

図書館を出て歩くこと15分。松日(まつひ)総合病院に到着。松日総合病院は、ここら辺じゃ一番大きな病院で施設も充実している病院だ。妹はこの病院の1052号室にいる。

「病院、ですか？」

古城(ふるしろ)は驚きの声を上げた。

そうだ、妹が入院していることまだ言ってなかったっけ。

「そう、病院」

「ご家族の方が入院しているのですか？」

「ああ、妹がな。て言っても、そんな深刻な顔しないでくれよ。妹は元気がいいからさ、病気してるなんて全然見えねーし」

「そ、そうですか。じゃあ、私がもっと元気にしてさしあげたいです」

「ああ。そうしてくれると、妹も喜ぶよ」

二人は妹のいる1052号室に向かった。1052号室は一人部屋で、今は枯れてるけど松日総合病院の象徴でもある桜が一番きれいに見える部屋だ。

1052号室に到着。俺はノックをして入った。

神聖ささえ感じる真っ白な病室の真ん中に設置された、これまた真っ白なベットに座って俺のほうを向く妹の姿があった。

「彩音(あやね)、今日はお前にお友達連れてきてやったぞ！　じゃーん」

俺は飛びっきり元気な声で、古城を紹介した。

「ど、どうも、初めまして。古城美百合(みゆり)と申します。よろしくお願いしますね、彩音ちゃん」

「わ、女の子だ！」

彩音はとびっきりの笑顔で喜んで見せた。

「おい、かたいぞ古城。彩音の友達なんだから、もっとフランクに

いこうぜ」
「あ、はい。私人見知りする方なんで……」
「人見知りって……お前。初対面の俺をあれだけからかっておいてよく言うぜ」
「現くんは、その……特別なんです」
な、何なんだこの「私にとって現くんは大切な人なんです」的な発言は。変にドキドキするじゃねーか。
「もしかして、お兄ちゃんの恋人？　お兄ちゃんにもやっと春が来たね」
「な、何言ってんだよ彩音。こいつとはさっき図書館で知り合ったばかりのやつでそんな関係じゃねーよ」
「そ、そうですよ。現くんとはまだ何もありません」
まだは余計だ！
「えー、まだー？　じゃあこれから何かあるの？」
ほらみろ！　彩音が突っ込んできたじゃねーか。
「い、いえ無いです！」
「そ、そうだ、彩音。お望みのもの借りてきてやったぞ」
そう言って話題を変えようと俺は、借りてきた3冊の本を渡した。もちろんその中には古城から勝ち取った『斜陽』も入っている。
「わー、全部あったんだー。ありがとね、お兄ちゃん」
彩音は純真な笑顔で微笑みかけた。
ずっと続くといいのに。この笑顔がずっと見られたらいいのに……そう思った———そう思うと、涙が出そうになったが、俺は必死にこらえた。ここで涙を流しでもしたら、彩音まで悲しくなってしまうから、とにかく彩音にはずっと楽しく明るく生きてほしかった。1秒でも悲しい気持ちにさせるのが惜しかった。
「ああ。それより彩音、古城は本が大好きなんだ。さっき話したけど、兄ちゃんの知らない本いっぱい知ってたぞ」
「お兄ちゃんは全然本読まないから、いっぱいあって当然だよう」
「そ、そうだけど。とにかくいっぱい知ってんだよ。な、古城」

「え、ええ。本はいっぱい読みました。母が好きなもので、母の影響で」
そう言った古城はどこか悲しげで、何か思うところでもある感じだった。
「へえ。お母さんかー。私のお母さんはね、私が1歳の頃に死んじゃったの」
「そ、そうなんですか！　すいません、余計なことを！　私……」
古城は慌てた様子で、そう言うと俯(うつむ)いてしまった。
落ち込むと俯く癖があるようだ。
「うんん。でもね、新しいお母さんがね、とっても優しいの」
新しいお母さんとは涼子(りょうこ)さんのことだ。歳は24で元レディースの総長という経歴を持つ、少々口が悪い女性だ。今は夜はスナック『竜遊館』、昼間の少しの時間で俺の友達の木山(きやま)のところのうどん屋『吉平(きちべい)』で働いている。あのダメ親父のどこに惚れたか知らないけど、涼子さん曰く「堅二さん（俺の親父の名前）は私がヤンチャやってた頃に、親だけには迷惑かけんじゃねーって、通りすがりに私をひっぱたいたんだ。それからそのことが引っかかっててな、もしかしたらこれは『恋』なんじゃねーかって思ったのさ。それから私は真面目に働いて、毎日毎日あの人に会いたいあの人に会いたいって願ってたら、運命的に出会っちまったんだ。それからは早かったさ」だそうだ。
涼子さん――――俺はそう呼んでいる。妹の彩音は彼女をお母さんって呼んでも無理は無い。だって、生みの親のことを顔ぐらいしか知らないんだから。でも俺にとって涼子さんは涼子さんだった。俺は小さかったけど産みの親の顔は覚えているし、思い出だってある。だから急に来て「あんたたちのお母さんだ」なんて言われても俺にはピンとこなかった。
「いつも私のために一生懸命働いてくれてるんだー。だから、今のお母さんが大好き！」
「そう……なんですね。彩音ちゃんはお母さんが大好きなんですね。

私も……お母さんが大好きです」
やっと古城の緊張も解けてきたようで、本の話なんかをして盛り上がった。トカトントンとかヴィヨンとか意味の分からない単語が出てきたので俺にはさっぱりだった（二人の会話に太宰って出てきたから恐らく太宰治のことだろう）けど、俺は分からないなりにも2人が楽しく会話している微笑（ほほえ）ましい光景が見れて幸せだった。

「そうだ。お姉ちゃんの名前は美百合だからみゆちゃんね」
本の話が一段落したところで、彩音がこう切り出した。
「え？　みゆちゃん？」
古城は彩音の言葉を理解できなかったのか、聞き返した。
「そうだよ。私は彩音だから、あやちゃん。そう呼んでほしいなー」
「呼び方ですね。ええ、分かりました。あやちゃん」
古城はニコっと笑って見せた。
「ずっとお友達でいてね。みゆちゃん」
それに答えるように彩音も笑った。
そうそれは、歳は離れてはいるけれども本当の友達の誕生だった。彩音にとって初めての同性の友達だ。
殺風景なこの白い部屋は、そんな二人の賑やかな笑い声で包まれていた。

第2章　病室（後書き）

どうも裏空裏空です。今回も太宰治さんの作品から、名前だけ『トカトントン』と『ヴィヨンの妻』を出させていただきました。

次回もよろしくお願いします。

第3章　母親

二人の楽しい会話も、古城(ふるしろ)が「門限がある」とかで終わることとなった。

「じゃあね。みゆちゃん、お兄ちゃん」

彩音(あやね)は手を振りながら俺たちを見送る。

「ええ。またお話しましょう、あやちゃん」

「じゃあな彩音。また古城を連れてきてやるよ。あと、木山(きやま)とか紫野崎(しのざき)も連れてきてやるからよ」

「うん。お願いねー」

何でも妹は、体力が少し弱っているから体を休ませることが第一だとお医者さんには言われていて、俺も面会時間を少しにしている。妹は俺や、木山や紫野崎が来ると決まって、全力で笑って、全力で遊ぶもんだから体力が持たない。だから、控えめにしないといけないのだ。

俺と古城は病院を出てそこで別れた。

今日は涼子(りょうこ)さん、うどん屋のバイト無い日だ。だから今日はぐっすり眠ってるだろうから飯作ってやらねーと。

涼子さんは彩音のところにはめったに行かない。何でも、彩音の笑顔を見ると、涙が出てしまうからららしい。俺にもその気持ちは分かる。俺だって、あの笑顔がずっと見られるならどんなことでもしてやりたいって思う。涼子さんはつんつんとがってるとこがあるけど、実はとっても泣き虫なのだった。彩音の病状が思わしくないって医者に言われた時は、一晩中家で泣き倒していた。俺たちと出会ってまだ3年しか経ってないのに、他人だった俺たちを、特に妹を思っていてくれる涼子さんの存在はとてもありがたかった。

「ただいまー」

今は俺と涼子さんの二人で住んでる住まい――――築数十年のオンボロアパートに到着した。
「涼子さん、また鍵かけずに寝てたのか？　ちゃんと鍵かけてって言ったよなー。無用心にもほどがあるぞ」
扉を開けるとすぐに、ド派手なドレスを着た涼子さんが寝転がってこっちを見ていた。
「わりー、めんどくさくて……彩音のとこか？」
涼子さんは全然悪びれたそぶりを見せず、片手をだらしなく挙げプランプランさせながら言った。
「うん、元気だったよ」
「そっか、そりゃ何よりだ」
現在時刻は４時を少し回ったところ。夕飯にはまだ早い時間であったが、涼子さんは今日早く職場に行かなければいけない日だった。１月３日、世間ではまだ正月休みだと言うのに、涼子さんの職場は休みこそ働かなくては儲からないらしい。謹賀新年もあったもんじゃない。
「今日は雑炊にしようって思ってるんだけどどうかな？　胃とか弱ってるだろ？」
「ああ……あのクソジジイ調子に乗りやがって、野菜スティックバリボリバリボリ何本も食わせやがんだ。胃が荒れちまったよ。何が「食べてくれなきゃお仕置きしちゃうよん」だ。ぶん殴ってやろうかと思ったぜ」
「三島（みしま）さんね……」
三島さんとは涼子さんの店の常連客兼松日（まつひ）高校の教頭だ。あのエロオヤジは今日も調子に乗って涼子さんに野菜スティック地獄を味合わせていたんだな……
全校朝会なんかで前に立つ真剣な教頭の顔を見ながら、涼子さんに野菜スティック地獄を味合わせているエロ教頭の顔を思い浮かべるのは俺の密かな楽しみだったりする。

しばらくして、雑炊は出来上がった。我ながら見事な塩加減、上出来だ。
「うんまそう。いっただきまーす」
涼子さんは熱いできたて雑炊なんかお構いなしにがっつく。
「どう？」
「うめーよ。やっぱ現（うつつ）は料理がうまいな。あたしが認めるよ」
涼子さんに認められてもなー……
涼子さんは料理を作れはするけれども、はたしてそれを料理と呼んでいいかは皆さんの判断を請いたいところだ。
刺身（一応パック売りではなく、涼子さんがさばいたもの）、生野菜サラダ（市販のではなく、盛り付けたのは涼子さん）、ラーメン（インスタント）……
どうだろうか？　本人は胸を張って家庭料理といっているが……
「そう言えば今日は、彩音に女の子の友達ができたんだ」
「へー。どんな奴なんだそいつは」
「なんか変わった奴で、古城美百合（みゆり）っていって俺と同い年の奴なんだけど俺や彩音に敬語使っててさー、お嬢様みたいなんだけど、いっさい嫌味が無いやつなんだ。とにかく本が好きなやつ」
「ほう。どんな本読むんだ？」
「太宰治とか芥川龍之介とか、あと谷崎……なんだったけな、とにかく俺の知らない本読んでんだ」
「谷崎潤一郎な。それくらい覚えとけよ。高1の教科書に出てくるだろ？」
「涼子さんでも知ってんのか……」
「でもは余計だ。こう見えても高校1年までは成績優秀の超真面目ちゃんだったからな」
「へー。そうですか」
「んだよその疑う目は。ホントだよ、国語はいっつも9だったんだから」
「10じゃないんだ」

「うっせい」
殴られた。親父には一度も殴られたこと無かったなんてどこかで聞いたような台詞だけど、あのダメ親父でも子供に一度も手をあげたりなんかしなかった。そこだけは褒めたい。
それにしても涼子さんは口より手が出るのか何回叩かれたか分からない。
ま、そこが涼子さんらしいところと言えばそうなんだけど……

第3章　母親（後書き）

どうも、裏空裏空です。今回も感想などいただけたら嬉しいです。
次回もよろしくお願いします。

第4章　夢

涼子(りょうこ)さんが雑炊を食い終わって2時間後。6時30分を回ったところで涼子さんは慌しく出て行った。冬の6時代ともなるとあたりはすっかり暗くなっていた。

「暇だ……」

一人残されたオンボロアパートの一室。決して広いとはいえない1DKが、いつもより広く感じる時はこの涼子さんが出て行ったときだ。

今日は1月3日。学校が始まるのは1月6日。後3日もあるのだ。冬休みの俺はというと、彼女がいるわけでも無いし、彩音のところか、あのボロ図書館か、家か、近くの松銀(まつぎん)商店街くらいしかない。松銀商店街は飽きるほど行ったし、隣町にできた大型ショッピングモールに客を取られてすっかり腐っちまったし、当分行くことは無いだろう。

「そうだ。木山(きやま)と紫野崎(しのざき)を呼んでゲームパーティーでもしよう！」

思い立ったが吉日というから、俺はさっそく二人に電話をかけた。当然貧乏なうちには子供の頃に買ってもらったゲームボーイ（未だに遊んでる）くらいしかないので、ゲーム機は持ってきてもらうことにする。なにせ紫野崎の家は金持ちだから、全てのゲーム機をコンプリートしている。

二人は了承してくれて、木山はお菓子を、紫野崎はゲーム機とソフトを持ってくることになった。

数十分後。

「邪魔するぞー」

「こんちは」

木山、紫野崎の順に俺の家に入ってきた。紫野崎は重そうなゲー

ムハードを持っているのに表情一つ歪めず、「こんちは」といつものクールで目つきの悪い紫野崎であいさつした。
「待ってたぜ、二人とも。暇で暇でしようがなくってさー」
「クンクン。これは涼子さんの香水の香り、いつにもまして上品なお香りだ」
「木山、涼子さんに手、出して無いだろうな」
「心外だな！　俺は涼子さんを見ていられるだけで幸せなんだよ。雇った理由はそんな理由じゃねーけどな」
　涼子さんは木山の家のうどん屋『吉平（きちべい）』で働いている。なんでも『吉平』の本店は老舗のうどん屋で、木山の親父さんが本店で修行を積み１５年前に開業したそうだ。こだわりのモチモチ麺とかつお節と昆布の絶妙な合わせ出汁が売りのうどん屋だ。何回か行ったが飽きのこない味で気に入った。そこの一人息子が木山翔太である。
「持ってきたぞ」
　紫野崎恭介は少し寡黙なところがあるが、すごいいい奴だ。クールな印象で結構モテるんだが、目付きの悪さからあまりに近づきがたいらしく、告白されたことは一度も無いようだ。
　父親は警視総監という警察のトップで、母親も現役の婦人警官という警察一家だ。剣道3段の彼は松日高校剣道部の部長をやっている。
「ありがと、紫野崎」
　早速俺はゲーム機の準備に取り掛かる。
「おい、シノちゃん！　これ全部一人プレイのゲームじゃんか！　どーすんのよこれ！」
　紫野崎の持ってきてくれたゲームソフトを見て木山は騒ぎ出した。
「すまん。俺一人っ子だから」
「なんだよう、その理由！」
「まあまあ、3人で回していこうぜ、な」
　俺は少し熱くなっている木山をなだめ、平和的にことを進めようとした。

「ごめん早川ちゃん。つい熱くなっちったよ。シノちゃん、ごめんな。さーて最初は俺がいかせてもらおうかなー」
木山がそう言うので、好きにさしてやった。
木山がプレイしているのはゾンビゲームの決定版『リビングデット3』だ。出てくる敵をただひたすら撃っていくという、単純そうに見えるが実はかなり戦略性がある人気の高いゲームだ。
木山はやりながら「どうするのシノちゃん？」とか「どれで攻撃？」などと、先陣を切ったにしてはどこか頼りない様子だった。
俺と紫野崎は木山の叫び声をBGMにして話し始めた。
「早川は大学どこ行くんだ？」
やっぱり今年受験生の俺たちの話題は進路のことになるのだった。進路か……
担任の白藤（しらふじ）先生には「あなたの成績なら結構上を目指せると思うのだけれど、大学進学は考えていないのかな？」と言われ、俺は適当に「夢が無いんです」と言って話を終わらせた。俺の夢って一体何なのだろう。
「まだ決めてない」
「そっか……早川の頭なら、結構いいところ狙えるんじゃねーか？」
白藤先生と同じことを言った。自分でも最近、何のために勉強してきたのか良く分からなくなってきた。高校ではトップの成績をとるってのを目標に頑張ってきたのだけれど、高校を卒業したらどうなのか。たぶん目標が見つからず、勉強を止めてしまうんじゃないのか。だから俺は、進学を考えることができない。俺のやりたいことが分かったなら誰か教えてほしいもんだ。でも俺自身、自分のやりたいことは何なのかを考えること自体が嫌になってきているんだ。面倒くさいんだ。
「まあ、な。やりたいことが見つかったら、そのうち決めるよ」
俺は白藤先生の時みたいに適当に流した。
「それより紫野崎はどうなんだ？　お前はやっぱ警察官か？　まあ、そのために剣道頑張ってきたんだもんな」

そうだ、紫野崎みたいに最初から道が決まってたら楽でいいのにな。警察――立派な仕事じゃないか。市民の安全を守るヒーロー。最初から決められていたにしては格好いいじゃないか。俺も誰かに決めてほしいもんだ。

「いや……」

紫野崎はそう口にして、いつもクールな顔に少し憂いを帯びた表情を浮かべて見せた。

「何かあったのか？」

「最初は俺も、警察官になろうと思ってた。でも、考えたら俺のなりたかったのは警察官じゃなかったんだ」

「じゃあ、ホントは何になりたかったんだよう」

ゲームを途中放棄して、木山が突っ込む。

「料理人……」

紫野崎はボソリとそれだけつぶやくと黙り込んだ。

「そっか、シノちゃん料理好きだもんね」

「ああ。料理は楽しいんだ。日々自分の考えた創作料理を作っていく中で、俺は充実感を感じていたんだ。だから、これを職業に出来たらどんなに幸せだろうと、思ったんだ。ただ……」

そこまで言って再び紫野崎は黙り込んでしまった。

「ただ、何だよ」

俺はすかさず言った。

「ただ、父さんを裏切ることになるんじゃないかって、騙してきたことになるんじゃないかって、そう思ったんだよ」

「そ、そうか……」

紫野崎は初めて会った時から警察官になると言っていた。紫野崎の親父（おやじ）さんも「私の後継者みたいなもんだよ。自慢の息子だ」と、紫野崎を自慢してたっけ。親父さんはきっと紫野崎が警察官になるのだとばかり思ってるんだろうな。

俺はとんでもない勘違いをしていたのかもしれない。最初から決まってるからこそ、悩むことがあることを知った。最初から決めら

れているってことは、これから先他に好きなことが、やりたいことがあってもできないってことじゃないか。ごめん紫野崎、楽だなんて思っちゃって……

「何よりも、俺を料理人の道に行こうと決意させてくれたのは、彩音のおかげなんだ」

「彩音が……」

初耳だった。彩音は人の人生を変えるほどの力を持っていたことに驚いた。

「彩音は俺の作った料理を食べることは出来なくても、俺の撮った自分の創作料理の写真を見せると、「おいしそう」とか「食べたいな」とか言ってくれたんだ。純粋に嬉しかったんだ。写真を見せるたびに喜んでいる彩音の姿を見たら、自分だけで楽しむじゃなくて人を幸せに出来る料理を作ってみたいと思ったんだ。」

「シノちゃんの料理人魂に火をつけたのは彩音ちゃんだったわけか。さっすが彩音ちゃん、俺の認めた女だけあるわ」

彩音はすごい。自分がどんなに苦しくても人を幸せにして、あるときは紫野崎みたいに人生だって変えちまおうとしてる。なのに俺は、何もできない……自分のやりたいことさえ見出せない。何やってるんだ俺。

「親父さんにはもう話したのか？」

俺は紫野崎をうかがうように、訊いた。

「まだだ。いづれは言わなくてはならん」

「俺、応援してるぜー。シノちゃんファイトー」

「ああ、俺も応援してる。きっと親父さんも正直に話したら分かってくれるさ」

「ああ、やってみる」

紫野崎はどこか希望に満ち溢れているようだった。

「それより、木山は何になるんだ？」

紫野崎は胸のつっかえが取れたのか、すっきりとしたいつもの無表情に戻り木山に話を振る。

「俺はもちろん『吉平』を継ぐさ。ま、あのクソ親父は「俺がぶっ倒れるまで、お前みたいな４分の１人前には厨房に立たせはしねえ」とか言ってるけどな。でも、俺の腕であのクソ親父を引きずり降ろしてやるさ」
木山にもやりたいことがある。俺はいよいよ焦っていた、悩んでいた。

それから俺たち３人はゲームを回しながら、楽しい夜を過ごしていた。
「あ、もうこんな時間か。俺明日の仕込みの手伝いしなきゃいけねーからさ、今日はもう帰るわ」
木山はそう言うと立ち上がり伸びをした。
時計を見たら、すでに午後１１時を回っていた。
「んじゃ、俺も帰る。明日から部活があるからな」
剣道部部長の紫野崎も帰ることとなった。
「じゃあなー」
「邪魔した」
と木山、紫野崎の順に出て行った。

ガチャリと閉まったドアの音は虚しくこの部屋に響き渡った。
「やりたいことか……何なんだろうな」
ドアの虚しい残響を掻き消すように、俺は大きな独り言をつぶやいた。

第４章　夢（後書き）

どうも裏空裏空です。毎回稚拙な文章ですが、今後ともお付き合いください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9170m/

一日桜

2010年10月8日13時40分発行